火恋

KAREN

連城三紀彦

火葬

KASOU

江苏工业学院图书馆
藏书章

連城三紀彦

文藝春秋

火恋

一九九九年七月二〇日　第一刷

定価はカバーに表示してあります

著者　連城三紀彦

発行者　和田宏

発行所　株式会社文藝春秋
〒102-8008 東京都千代田区紀尾井町三-二三
電話代表（〇三）三二六五-一二一一

印刷　凸版印刷
製本　大口製本

©Mikihiko Renjō 1999 Printed in Japan
ISBN4-16-318540-2

万一、落丁乱丁のある場合は、送料当方負担でお取替え致します。小社営業部宛お送り下さい

目次

情人 5
騒がしいラヴソング 45
灰の女 83
火恋 127
黒夜 173

装丁　上原ゼンジ

写真提供　Aスタジオ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

火恋

情人

雨が降りださなければ、女に目をとめることはなかったのかもしれない。

フェリーの手すりには観光客が鈴なりになっていて、小柄な女はその中にまぎれこんでいたのだから。

私はむしろ、手すりから身を乗りだして騒いでいる若いアメリカ人夫婦の、妻の方に視線をまとわりつかせていた。肉感的というなら、ジーンズが破れそうなほど張りつめた彼女の腿の方がはるかにそうだったし、豊かな体とはアンバランスに無邪気な笑顔は、どこか結婚前の妻に似ていたのだ。

私はもしかしたら、妻との離婚を真面目に考えだした時から自分が妻の体に飢えだしたのかもしれないと思いながら、湾岸にゆっくりと流れる香港のビル群とそのアメリカ女とを、一つの風景のように溶けこませて眺めていた。

風景のように？　本当にそうだろうか……。

湾岸のいくつかの地点をつないで走る『スターフェリー』と呼ばれる定期船は、現地人や在住者にとっては重要な交通手段であり、旅行客にとっては重要な観光スポットだ。日本の大手新聞

社の支局員として香港に渡ってきて一年が過ぎようとしていた私は、いったい自分がそのどちらを目的に船のベンチに座っているのか知らなかった。『もう一年か』という思いと『まだたったの一年か』という思いとが入りまざり、ただの旅客のように……同時にこの異国の美しい町にも飽きてしまった住人のように、船の揺れに合わせて半端に視線を揺らしていただけだったのかもしれない。

叫び声があがり、あっという間に観光客の群れは手すりを離れ、私の座っていたベンチの方へと逃げこんできた。

それが突然降りだした雨のせいだと、すぐにわからなかった。ほんの一瞬前まで雨雲などどこにも見えず、空も海も青くきらめいていたのだ。

香港では雨は突然降ってくる。

そして同じ突然さで、その女は、雨が人影を一掃した手すりを背に浮かびあがった。

私と同じようにベンチの端っこに座っていた乗客のうちには、斜めに大きく吹き込んでくる雨をよけて立ちあがり、さらに客席の中の方へと逃げる者もあったが、私は雨が片方の脚をびしょ濡れにするのも構わず、そこにじっと座っていた。私はその一瞬、自分の目がカメラのレンズになったような気がしたのだ。

一瞬前まで巨大なスクリーンに映し出されていた海や高層ビル群が灰色にぼやけ、ピントがその女に鮮やかに合い……私はほとんど反射的に目のシャッターを切り続けた。記憶に残すというよりも、一瞬一瞬の女の表情を自分の体へとなまなましく焼きつけるかのように。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

女はただ後ろ手に手すりをつかみ、海に背をむけてそこに突っ立っているだけのようだった。激しい雨風に襲われて、全身がずぶ濡れになっているのに、それも忘れたようにただじっと、静かに……。いや、かすかな微笑が雨とともに顔ににじんでいた気がする。その微笑は突然の雨を快いシャワーとして楽しんでいるようにも、船内に起こった避難民の群れに似た混乱を少し離れた位置から楽しんでいるようにも見えた。

もっとも正確なことはわからない。彼女は小さめな顔の半分近くを黒いサングラスで隠していたし、雨は一分たらずのうちにやんでしまい、その間、私の目は彼女の体の方に奪われていた。目を奪われ、同時に意識の全部を奪われていたのだろう。私の目はまちがいなくその女のすべてにむけてシャッターを切ったものの、体には現像するまでにまだ時間のかかる暗いフィルムが残っただけだった。夢中で見つめながら、私にわかったのは彼女がまだ若い香港女性であることぐらいだった。それから雨に服の生地と肌の区別を消され、平然と裸身をそこにさらけだしているような印象――。

平然と？　そう、彼女が香港の女であることはまちがいない。日本の女の貧弱な体が決してもちえない傲慢なまでの誇り高さをごく自然にその体からにじませていたのだから。

だが、それ以外の何もはっきりと形にならないまま、一分近い時間が流れ……降りだしたのと同じ突然さで雨はやんだ。空にも海にも眩しい光がよみがえり、ふたたび香港の町が陽画に反転されて視界に大きく迫ってきた。雨がやむと同時に、船は埠頭に近づき、うごめきだした乗客の流れが女の姿を飲みこんだ。

真夏が近づき香港は雨季に入っていたにもかかわらず、私はその時の雨を季節が犯した馬鹿げたミスのように感じていた。灰色の火花にも似たつかの間の雨……それが通りすぎるとともに私は女のことを忘れ、下船を急ぐ客たちの渦の中にその姿を探すこともなかった。

スターフェリーの上で、私は一人ではなかった。楊志健（ヤン・シーチェン）という私より五歳年下の地元局員が私の隣りに座っていた。

ヤン・シーチェンは、もう何年も前から支局に勤めている男で、年に二、三度仕事がらみで東京を訪れていた彼とは私の香港転勤が決まる前からちょっとした交遊があった。一昨年の正月、まさか翌年自分の転勤の場になることも知らずに妻と二人でこの町を旅した際には、案内役も務めてもらっている。

当然ながら彼は私の転勤を誰より喜んでくれたし、広東語はもちろん英語さえあまり得意ではない私が、この東洋と西洋が東京よりもはるかに熱く色濃く溶けあった町で一年間、何とかうまくやってこられたのも彼の上質のサポートがあったからだ。

日本語も英語も巧みで、頭の回転も早く、人間的にも魅力のある青年だった。四十に手の届こうとしている彼を青年と呼ぶわけにはいかないだろうが、そう呼んだ方が自然な、ある種素朴な若さをもっていたのだ。

東京でのちょっとした交遊はこの一年のうちに親友づきあいと呼べるほどのものになっていたし、その日も日曜にもかかわらずデスクワークを残して出勤していた私を手伝いに来てくれ、仕

事が終わると、「ちょうどいい。ペニンシュラのアフタヌーンティーを飲みにいきましょう。ちょっとした用もあります」彼の方からそう言いだしたので、私たちは支局のある中環(チュンワン)からフェリーに乗ったのだった。

女を見つめている間、肩をくっつけて座っていたヤンの存在など完全に忘れていた私は、雨がやんで我に返ると同時に、自分の露骨すぎた視線をどう思われたか心配になってふりむいたが、ヤンはいつの間にか年寄りのアメリカ人夫婦に席をゆずり、その夫婦と英語で談笑していた。幻のような雨と女にはまったく気づかず、いつもの純朴な笑顔で老夫婦をいたわるように喋っていた。そうとしか見えなかった。だから三十分後、ペニンシュラホテルのラウンジで、彼が同じ笑顔で一人の女の話を始めた時、すぐには彼の語る女と、問題の、突然の雨がデッキ上に浮かびあがらせた幻にも似た女とを結びつけて考えることなどできなかった。

「ちょっとした用って？」

ホテルのティーラウンジの隅っこのテーブルにつくと同時に私は、支局を出る際の彼の言葉を思いだして、そう訊いた。

「……それより、まず、奥さんのことを教えてください。私の話はその後にします。――三日前でしたか？　木曜日。東京から電話があったところまで聞きましたが、それ以後の電話は？」

私が首をふると、

「困ったコトです」

私をまねるように首をふり、顔をしかめて同情を伝えてきた。二カ月前、日本のゴールデンウ

ィークに三日間だけ東京に帰った際、妻から唐突に、『好きな男ができたので別れてほしい』と切りだされていたのだ。『夏にもう一度戻るからその時にまた詳しい話をしよう』と逃げたのだが、先週と今週と二度にわたって国際電話をかけてきて、妻の道子ははっきりと離婚の決断を迫った。私はその大すじをヤンに話してあったのだ。

「本当に困った問題です……あなただけでなく、妻も……奥さんもいい人なのに」

「一度逢っただけではわからないよ、彼女のことは」

「二度です。この香港に二人が来て、その後私が東京に行った時、マンションに招待されました。あの時は私、急用あって一時間もいられなかったけれど……ああ、しかし、ムラノさん、あなたは奥さんを愛しているでしょう。それなら奥さん、やっぱりいい人だということです」

私は首をふった。

「いい人なのかもしれない。だが、今はもう愛していない」

「それなのに奥さんと別れたいはず……それなら奥さんと別れようとしない」

ヤンはそう言ってから自分が日本語の使い方を間違えたことに気づいて、「それなら奥さんと別れたいはず……それなのに奥さんと別れない」と言いなおした。

「別れないということ、奥さんをまだ愛しているということ――違いますか」

私は、『愛』という言葉は英語や中国語と違って、日本語ではもっと曖昧な、半端な言葉だと説明しようとした。欧米人や中国人ほど感情が豊かでもなく、はっきりもしていない日本人にとって、それはつかみどころのない言葉なのだと――。私はまだ妻を愛しているのかもしれないし、

もう妻を愛していないのかもしれない。その両方なのかもしれない……。

だが、私が気もちそのままに半端にしか口を開けずにいるうちに、ヤンの着ているジャケットのポケットがベルを響かせ、彼はその方に気をとられた。

携帯電話でヤンは誰かと喋りだした。早口の広東語で――。この香港で広東語の学校に通い始めて一年になるのに、私の語学力はまだ幼児より劣っていた。何とか聞きとれたのは、『朋友(パンヤウ)』という語だけである。

私から顔をそむけ、しきりに首をふり、彼は何度も日本語の『友達』にあたるその語を口にした。

「朋友……朋友……朋友……」

怒ったような声だが、彼が本当に怒っているのかどうかはわからなかった。広東語は早口で語られると、日本人には戦いを挑んでいるように聞こえるのだ。語調に合わせて、額に長く垂れた前髪が痙攣するように揺れた。長い髪？

電話を切り、謝罪の言葉を口にしたヤンは、私の視線に気づいて不思議そうに、「どうかしましたか」と訊いてきた。

「いや、さっきから君の顔がいつもと違う気がしてたんだが……髪型が違うからかな」

いつもは整髪料でオールバックに撫でつけているのに、今は脂っけのない髪が額に乱れ落ちている。ヤン・シーチェンは銀行員の息子らしい育ちのよさと真面目さとをもった男で、それは何より顔に現れていた。童顔の方だが、その童顔に似合った人懐っこい笑みを浮かべる時でさえ、

真っ正面から撮った記念写真のように目鼻が定位置におさまって整然としている。それなのに今日の顔はどこかが乱れていた。このところ支局での仕事が忙しかったので疲れが出ているのかとも思ったが、どうもそれだけではない……。

「そんな風に乱れた髪をしている君を見るのは初めてじゃないかな」

そう言いながらも、私は決してそれが髪の乱れのせいだけでもないと感じていた。

「セイハツ料をつけるのを忘れたのです。フェリーの上、風が強かったから」

髪をかきあげながら顔に広げた微笑にも、今まで一度も感じたことのない野卑さが覗いた。そんな気がしたが、私はその印象もさっきの通り雨と同じように無視した。大したことではないのだ。電話にむけて広東語で咬みつくように喋る彼を見たからだろう。私の理解できない言葉で他の香港人と喋りだす瞬間、ヤン・シーチェンは、これまでだって不意に私の同僚でも『朋友』でもなくなることがあったのだ。

だが、かと言って私はその時自分が日本人だと強く意識していたわけでもない。ペニンシュラの玄関から入ってすぐに広がるラウンジは、香港の『名所』の一つで、この時も周囲にはたくさんの日本人観光客が『名物』のアフタヌーンティーを飲んでいた。日本人が群れているだけで歴史と伝統を誇る石の壁も豪華なシャンデリアも、品のいい紅茶の色や香りも壊れ、そこにあるのはただの露天市場のような猥雑さだけだった。絶え間なく耳にとびこんでくる日本語を聞きながら、私はそんな日本人たちを中国人や英米人と同じ見知らぬ外国人のように感じていたのだった。

要するに私は、日本人としても、道子の夫としてもひどく半端に漂いながら、ヤンの前に座っ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com